

コンテンツ緊急電子化事業

出版社・編集者向け
電子書籍校正の手引き

2013年2月12日 (ver 1.4)

コンテンツ緊急電子化事業プロジェクトチーム
JPO日本出版インフラセンター 標準化委員会

目次

はじめに.....	2
1. 緊デジ電子書籍のフォーマット	2
2. 電子書籍の特徴と紙の書籍との違い.....	4
3. 校正用の環境について.....	5
4. 校正可能な範囲と回数.....	6
5. 校正システムの使い方	9
6. 校正の例.....	11
7. 例外ケースの処理.....	11

更新履歴

2013年2月12日	ver. 1.4	EPUB3の校正方法を追加。目次リンクの説明を詳細にして表とBinB画面を追加。 チェックポイントに「見開きと単ページのモードを切り替えて確認する」を追加。 校正システムの使い方「校正作業の流れ」で修正時の操作方法を詳細にした。
2012年11月28日	ver. 1.3	外字の確認方法に関する記述を削除（BinBでは表示フォント変更が不可能なため）。
2012年11月14日	ver. 1.2	EPUB 3に関する情報を修正。「目次からのリンクについて」を追加。
2012年10月18日	ver. 1.1	XPDF校正ビューアでは見開き表示の確認が出来ないことを追加。初校までの作業期間を修正。
2012年8月20日	ver. 1.0	

はじめに

今回の電子書籍制作は、経済産業省の「コンテンツ緊急電子化事業」（緊デジ）に基づいて行われます。

緊デジで制作する電子書籍には、いくつかの制限があります。これは仕様や作業工程を絞り込み、制作ラインを統一化することでコストを下げ、短期間に多数の電子書籍を作成するためです。また、機能を限定したフォーマットとすることで、技術仕様の発展に伴う将来的な変換にも対応できるようにしております。

そのため、通常の電子書籍作りに比べると制作方法の自由度が制限され、個別のご要望やご依頼にお答えできない部分がございます。校正・校了のやりとりは、以下のガイドラインに基づいて行っていただきますよう、ご協力をお願いいたします。

なお、緊デジの電子書籍制作に関する校正の受け渡しは基本的に緊デジサイトの「出版社メニュー」上で行います。修正依頼や指示に関する責任主体はすべて中核企業である（株）パブリッシングリンクにあります。場合によっては直接、制作会社と出版社様との間で修正指示のご連絡を行っていただく場合もございます。ご了解ください。

1. 緊デジ電子書籍のフォーマット

まず最初に、制作する電子書籍のフォーマットについて簡単に解説します。電子書籍について知識のある方はこの章を飛ばし、次章の「校正用の環境について」からお読みください。

電子書籍にはEPUBやPDFなどたくさんのフォーマットがありますが、今回の緊デジでは、フィックス型のX MDFとドットブック、リフロー型のX MDFとドットブックという4種類に限定して制作を開始しました。

この4種類に限定したのは、事業開始当初にこれ以外の新しいフォーマットや販売実績の少ないフォーマットへ対応できるだけの量産体制が確保できなかったからです。

その後、緊デジではEPUB 3形式での制作を決定しました。緊デジで作成するEPUB 3は日本電子書籍出版社協会が発表した「電書協EPUB 3制作ガイド」に準拠したものとなります。

・フィックスとリフロー

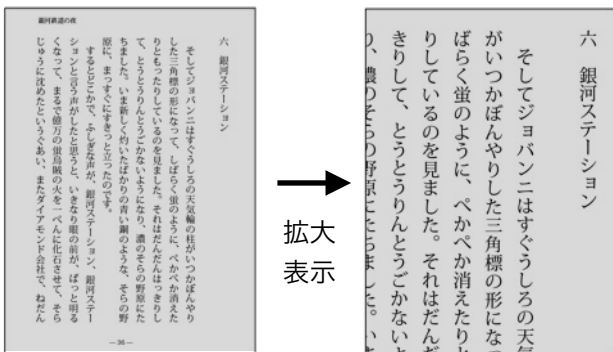
緊デジのフィックス型とリフロー型は、「画像型とテキスト型」に言い換えることができます。

印刷物である底本を1ページずつスキャンし、その画像を1冊ごとに束ねたものがフィックス型です。デジタルコミックで使われているほか、電子書籍では再現の難しい複雑なレイアウトの本や、図版の多い本、DTPデータが残っていない古い既刊書、特殊な記号や数式などを多用している書籍などもフィックス型で制作します。

フィックス型の特徴としては、制作コストが安く、どのような複雑な書籍でも電子化することができます。ただし文字までも画像化してしまうため、ファイルサイズが50～100MBと大きくなるほか、電子書籍の魅力である「検索」もできません。将来、OCRという画像文字認識技術が発展すればフィックス型でも検索の可能性はでてくると考えていますが、いまはまだ難しいのが現状です。

また、通常の書籍の判型サイズに比べ、KoboやKindleなどの電子書籍リーダーデバイスは表示画面サイズが6インチ程度です。これは文庫本よりもさらに小さいため、ページ全体が縮小表示され、文字が小さくなってしまいます。スマートホンなどでの表示も同様です。そのため、緊デジではフィックス型の閲覧には7インチ以上のタブレットデバイスを推奨しています。

リフロー型というのは、底本書籍の文章をテキストとして取り出し、電子書籍として組み直したものです。技術的にはWebページを（日本語の場合は縦組で）パッケージ化したものと考えられます。検索もできますし、文字のサイズも読者が好きなように変更できます。ただし文字の表示サイズを大きくするとテキストはリフローされ、全体のページ数が増えるため、「Xページを参照」という指示は出来ません。

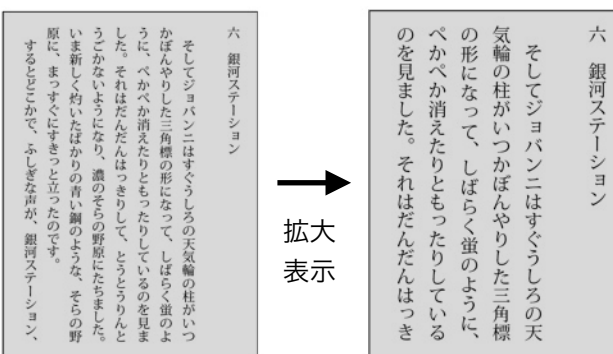


フィックス型（画像型）

フィックス型の電子書籍は、紙の本をそのまま画像スキャンしたもののなので、底本のノンブルなどもそのまま表示される。

底本をそのまま表示しているため、文字サイズは小さく表示されてしまう。拡大表示すると表示エリアから文字がはみだしてしまう。

段組や図版などの入った書籍もそのまま電子化できる。



リフロー型（テキスト型）

リフロー型の電子書籍は、デバイスや環境によってフォントや文字サイズなどが変わる。文字のサイズを拡大すると、文章は先に送られ、自動で表示ページ数が増える。

複雑なレイアウトは再現できず、基本的には文芸など文字中心の読み物に採用される。

現在では一般的に「電子書籍」と言った場合、リフロー型を指すことが多いようです。読者からすると自分の視力に合わせて文字の大きさを換えられたり、好みのフォントに変更できる点が魅力的です。また、テキストなので1冊のファイルサイズが小さく済み、1MB以内に収まってしまいうタイトルが大半です。メモリーカード内にたくさんの電子書籍を保存しておいて、好きなときに選んで読めるという利点があります。

しかし、リフロー型は底本からテキストを取り出して組み直すので、フィックス型よりも制作コストがかかります。DTPデータが残っていない場合は人間やOCRなどによる再入力が必要となりますし、DTPデータか

ら制作した場合も、印刷と電子書籍では使用できるフォントや文字コードが異なるため、「電子書籍では使用できない文字」が出てしまい、校正の時には文字化けがないかどうかの確認も必要となります。

・XMDFとドットブック

フィックス型とリフロー型のそれぞれに、XMDFファイル形式とドットブックというファイル形式が存在します。XMDFはシャープ社の、ドットブックはボイジャー社のファイル形式ですが、緊デジでは両ファイル形式のうち共通の機能のみを選択して仕様化していますので、XMDFとドットブックに関する機能差は無いものと考えていただいて結構です。

出版社様からの特別なご指定がない場合、緊デジでは初回制作時に制作会社の空きラインによってXMDFかドットブックかを指定します。2回目以降の制作では、初回に指定したファイル形式で制作を行います。

電子書籍を購入していただく読者様にも、XMDFとドットブックそれぞれの見え方や操作方法の違いなどを、できるだけ意識させない方向で販売する予定です。

ただし校正の時点では、XMDFとドットブックでそれぞれビューアの方式が異なるため、電子書籍のチェック方法にも違いが出てまいります。XMDFでは見開き表示の校正が出来ないため、見開きでの確認が必須の場合はドットブックをご指定ください。校正用のビューアに関しては3章で説明します。

なお緊デジではXMDFとドットブックのほかに、EPUB3での制作も開始しました。EPUB3でも電子書籍としての機能差はほとんどありません。校正についてはドットブックと同じ方法で行います。

2. 電子書籍の特徴と紙の書籍との違い

フィックス型の電子書籍は、底本をそのままスキャンした画像を表示しています。デジタルコミックとほぼ同じです。そのため、底本が大判の判型で、電子書籍の表示デバイスが小型ディスプレイの場合、文字が小さく縮小されてしまい読みづらくなってしまいます。

緊デジでは電子書籍販売時に推奨表示サイズの提示をしたり、ビューア側に余白削除の機能をつけてもらうことなどを働きかけていますが、根本的な解決は難しいことをご理解ください。

また、フィックス型は画像なので、本文を検索することができません。しかし電子化（画像化）した書籍はデザインを損なうことなく版元の意図したとおりの状態で読者に届くため、厚い紙の書籍を持ち歩く必要はなくなります。

リフロー型の電子書籍では本文の全文検索が可能です。ただし緊デジの販売用仕様ではセキュリティのため、購入者による印刷や本文コピーは禁止となるように制作しています。

リフロー型電子書籍では、表示フォントの指定が不可能という点が特徴です。ビューアやOS、デバイスなど、購入ユーザーの環境によって、表示されるフォントのデザインが違います。

Windows：MS明朝、MSゴシック、メイリオ
iOS (iPad/iPhone)：ヒラギノ明朝、ヒラギノゴシック
Androidタブレット：モトヤフォント、IPAフォントなど
Kinoppy：游明朝体
T-Time：秀英太明朝
XMDF (ガラパゴス) ビューア：LC明朝、LCゴシック

フォントが違くとユーザーが受ける印象も大きく変わります。フォントのサイズもユーザーによって変更される可能性があります。そのため、同じ電子書籍であっても読者によってさまざまな「見え方」に違いが生じてしまいます。さらに、ビューアがカラーを再現できるとも限りません。例えばkoboやKindle、Sony Readerなど電子ペーパーを採用したデバイスはモノクロ表示です。

したがって「見え方」や「表示」の部分に校正の指示があっても、それを再現して修正することが不可能となります。「この部分を太字に」「この文字の色は赤に」といった指示を出したい場合は「この部分の文字を目立たせて」といった表現で、方法を制作者に任せてしまう方が良いでしょう。

3. 校正用の環境について

電子書籍の校正は基本的にPC (Windows) ディスプレイ上で行います。紙の書籍のようにプリントアウトへ赤字を入れていくという方法では最終環境と異なった表示になり、トラブル発生する可能性が大きいいため、ディスプレイ上での確認に慣れていただくことをお願いしています。

緊デジで用意している校正用ビューアはWindows (XP SP2以上) 専用です。また、フィックス型の場合は天地1024ピクセル以上のディスプレイサイズが必要となります。天地800ピクセル以下のノートPCなどでは、電子書籍画面の表示が非常に小さくなってしまい、校正作業が困難となる場合があります。

なお、校正にはインターネット接続環境と、.bookおよびEPUB 3ではHTML5に対応した最新型のWebブラウザが必要となります。

万一のファイル流出を防ぐため校正用の電子書籍ファイルにはDRMがかかっており、緊デジが用意した校正用ビューアのみで閲覧が可能となります。一般的なXMDF用のブンコビューアや.book用のT-Timeビューアなどでは、緊デジの校正用ファイルを開くことはできません。

実際の電子書籍書店での配信時には、AndroidタブレットやiOS (iPad、iPhone) やMacなどでの購入および閲覧も可能となる予定ですが、校正用ビューアに関しては現在はWindows環境でしか動作しません*のでご注意ください。

*.bookおよびEPUB 3校正用のBinBビューアはMacやiPadでも動作しますが、緊デジでは動作保証や検証を行っていません。

緊デジ用の校正ビューアーは、XMDF用と.book用とで閲覧方法に次のような違いがあります。

・緊デジ用XMDF校正ビューアー

緊デジ用のXMDF校正ビューアーは、シャープがXMDF情報スクエアで配布している「確認用PCビューア」と同等の機能をもったビューアーソフトウェアです。見開き表示の確認は出来ません。緊デジサイトの出版社メニューからダウンロードして、ご自分のPCにインストールしてください。インストールや使用方法に関しては、ビューアーに同梱のヘルプファイルを参照してください。

・緊デジ用.book校正ビューアー

緊デジ用.book校正ビューアーは、ボイジャーの用意したBinB Reader (Books in Browsers：ビーインビー)を利用します。これは単独のビューアーアプリではなく、HTML5以上対応のWebブラウザを利用した校正用ビューアーで、見開き表示も可能です。なお校正プラグインのQuick Markupは使用しなくてもかまいません。

Internet Explorer バージョン9以上

FireFox バージョン7以上

Google Chrome バージョン15.0.874.121以上

Safari バージョン5.1以上

対応ブラウザの詳細や設定などはこちらのページをご覧ください。

<http://tinyurl.com/binb-store>

BinB Readerの使用方法につきましては、申請システム内にあるPDFマニュアルをご覧ください。

緊デジでの校正では、基本的に各ビューアーについている「メモ機能」や「校正ツール機能（BinB Readerでは「Quick Markup」が利用できる）」などは使用しません。電子書籍を開いて内容を確認する、修正指示したいページがある場合にそのページを印刷する、という二つの基本機能で作業を進めます。ただし、希望があれば校正ツール機能を使用してもかまいません。

4. 校正可能な範囲と回数

今回の緊デジ事業によって作成される電子書籍は「既刊本をそのまま電子化したもの」となります。そのため、「今回の電子化を機に、大幅な修正や改訂をしたい」というご希望にはお応えできません。

校正の回数は原則的にフィックス型が1回のみで責了・もしくは校了。リフロー型は2回（初校・再校）で責了・もしくは校了となります。従って、修正指示が多くなってしまうと最終の確認が不十分なまま、商品が流通してしまう可能性があります。

もちろん校正なので明らかなミスや間違いは修正していただきたいのですが、すでに出版されている書籍の電子化事業ですので、電子化に際しての新たな推敲は制作予算を超えてしまうため、ご容赦ください。修正に関しては、制作会社へ疑問文を投げかけるのではなく、明確な「指示」としてお伝えください。技術的に修正が可能かどうかなどの疑問に関しましては、パブリッシングリンクまでお問い合わせください。

フィックス型のチェックポイント：

- ページ順序（台割）の間違い
- 見開き位置のズレ・間違い（BinBでは表示ウィンドウの幅を変えると単ページと見開きが切り替わります。必ず両方のモードで最終ページまで確認してください）
- 目次リンクの動作・リンク先
- 不要なページの削除
- 不要な情報の削除（空白となります）
- 画像上のゴミとり
- 裏写り
- にじみ・モアレ・コントラスト
- 版面表示位置の踊り
- 電子化クレジット（奥付）

※電子化クレジット（奥付）に修正が発生した場合は、出版社メニューで書誌情報を直接修正し、校正の戻し時に、修正した箇所の指示とともに「電子化クレジット修正済み」とお伝えください。

リフロー型のチェックポイント：

- ページ順序（台割）の間違い
- 目次リンク
- 誤字・脱字・数字や情報の間違い
- 記号や外字の文字化け・間違い
- 不要な図版の削除
- 画像上のゴミとり
- 挿絵・図版・イラストなどの表示位置
- 電子化クレジット（奥付）

※電子化クレジット（奥付）に修正が発生した場合は、出版社メニューで書誌情報を直接修正し、校正の戻し時に、修正した箇所の指示とともに「電子化クレジット修正済み」とお伝えください。

フィックス型校正の不適切な例：

- × 「文字の修正／文章サシカエ」 → 底本を画像としてスキャンしているため、文字単位での修正は出来ません。
- × 「トルツメ」 → トルは可能ですが、取った後は空白となります。ツメたり送ることは出来ません。

基本的に、フィックス型の場合、台割やページ抜けなどの修正指示以外、文字や文章単位での修正はほぼ不可能となります。可能なのはブロック単位での削除（白塗り）のみです。もし版元でどうしても文字単位の修正を望む場合は、底本にラベルシールなどで修正したものを入稿するようにしてください。

カラーの色味や図版中の小さな文字についての再現や修正は困難な場合が多いので、ご不明なときはパブリッシングリンクまでご相談ください。なお、緊デジのフィックス版は底本を断裁してスキャンするため、見開きの図版はノド部分が欠けることがあります。ご了解ください。

リフロー型校正の不適切な例：

- × 「全体的に文字を大きくして読みやすく…」 → 文字サイズは読者が自分で変更するため、設定不可能。
- × 「行間あける」「行長を短く」「字間ツメル」 → 設定不可能。
- × 「フォントをゴシックに変更」 → 設定は可能だが読者が自分で書体を変更できるため、無意味となる。
- × 「この部分を太字に」 → デバイスやビューアーに太字やイタリックの表現能力がない場合が多い。
- × 「この文字の色を赤に」 → デバイス自体がモノクロ表示のものも。

基本的に、リフロー型の電子書籍の校正は「見え方」やデザイン、レイアウトに対してではなく、「文章の修正」を指示してください。文字をトル、変更する、文章の一部を削除する、差し替えるといった校正指示であればまったく問題ありません。

校正ビューアーに不具合が感じられる場合や、画質の確認など疑問点を細かく検証したい場合は、iPadやNexus7、Koboなどで実機検証をしていただくことも可能です。パブリッシングリンクまでお問い合わせください。

・記号や異体字などの文字化けについて

書籍を電子化するとき、DTPデータから取り出したテキストや外字などが文字化けする可能性があります。テキストの書き出しやコピー&ペースト時に変換してしまう外字などがあるからです。

リフロー型XMDFおよび.bookの場合はシフトJIS内の文字しか使用できません。機種依存文字を含むシフトJIS外の文字はすべて外字画像化され、文中に埋め込まれます。EPUB3の場合はUnicodeなので画像化される文字の数も少なくなりますが、それでもなくなるわけではありません。

外字は画像化されるので、ビューアー側の表示フォントとの組み合わせによってはデザイン上の違和感が生じる可能性もあります。制作の時点で外字画像のフォントデザインを表示フォントに合わせても、実際に購入・閲覧する読者の表示フォントとは違ってしまふ可能性があります。外字の記号や文字そのものが間違っている場合は修正指示をしていただけますが、外字記号に対して「フォントを揃える」のような指示は不可能となります。

また、記号や異体字などの外字修正を伝える場合、メールフォームでは送受信時に文字化けする可能性があるため、JPEGやPDFなどの添付ファイルで指示を伝えた方が確実です。

詳細はこちらの『InDesignデータ → 電子書籍で字形の変化する文字』をご覧ください。

<http://www.pubbridge.jp/info/20120611t/>

・目次からのリンクについて

緊デジの電子書籍では、目次から該当ページへジャンプするためのリンクが設定されます。ただし、以下のような制限があります。

フィックス型のXMDFと.bookでは、目次ページ画像の該当文字列領域から該当本文画像へクリックابلマップによる片方向の目次リンクを作成します。

リフロー型のXMDFと.bookでは、章・見出しなどの大項目は相互リンク、その下の小項目は片リンクとします。リフロー型EPUB 3の場合は、本文内の目次ページから片リンクを貼り、ナビゲーション文書には表紙・目次・電子化クレジットの最低限のみを片リンクで記述します。

.book（フィックス／リフローのどちらも）を校正する際、BinB右下のナビゲーション（移動メニュー）内に項目が表示されますが、この部分は無視してください。目次リンクは、本文中の目次ページ項目をクリックして該当ページへ移動します。また、下部スライドバーの上（章表示エリア）に「表紙」「目次」といった項目が表示されることもありますが、こちらも販売時には使用しない機能のなので無視してください。

フィックス型のEPUBではナビゲーション文書による目次を制作し、クリックابلマップによるリンクは行いません。これは、EPUBには独自のナビゲーション機能が用意されているためです。校正の時はBinBビューアー右下の「移動メニュー」内の項目から該当ページへ移動するかどうかを確認します。本文中の目次ページ項目をクリックしても移動しません。

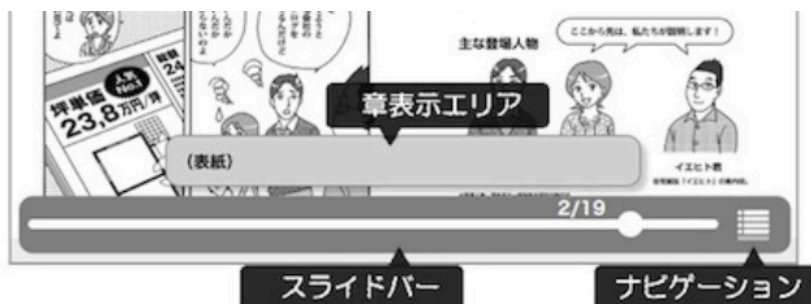
リフロー型EPUBの場合、右下の「移動メニュー」からは「表紙」「目次」「電子化クレジット」へ移動できます。本文中の目次ページ項目をクリックすれば該当ページへ移動します。

なお、緊デジでは本文中のインターネットURLや索引、注釈などはリンク設定いたしません。

またどのフォーマットでも、目次リンクは章または節（章の上位に部がある場合は部を含む）の1階層下まで（上から二階層まで）となります。ただし、底本の目次にノンブル表記がない場合は、ノンブル表記のある階層までになります。底本の目次ページに対応するノンブルが表記されていない場合、リンクは設定されません。

	フィックス	リフロー
XMDF	目次ページのクリックابلマップによる片方向リンク。	目次ページテキストから章・見出しなどの大項目は相互リンク、その下の小項目は片リンク。
.book	目次ページのクリックابلマップによる片方向リンク。「移動メニュー」ナビゲーションは無視する。	目次ページテキストから章・見出しなどの大項目は相互リンク、その下の小項目は片リンク。「移動メニュー」ナビゲーションは無視する。
EPUB 3	「移動メニュー」ナビゲーションを目次として利用。	目次ページテキストから2階層まで片リンク。「移動メニュー」ナビゲーションからは「表紙」「目次」などのみ。

BinBでの移動メニュー（ナビゲーション）ボタンは画面右下に表示されます。詳細はBinBの操作マニュアルをご覧ください。



章表示エリアの表示は気にしないでください。ナビゲーションはEPUBでのみ動作します。.bookの場合は無視してください。

5. 校正システムの使い方

制作会社での電子書籍制作が初校まで進みますと、出版社へ「初校のご連絡メール」が送信されます。緊デジサイトの出版社メニューでタイトルをご確認ください。出版社メニューの「申請システム操作マニュアル」は緊デジサイトからダウンロードしてください。

[申請システム操作マニュアル] <http://www.kindigi.jp/download/>

・校正作業の流れ

制作会社へ底本到着後、電子化作業

↓（制作作業：出版社が底本を発送してから、フィックス10営業日、リフロー15営業日程度）

「初校のご連絡メール」が届く

↓

出版社メニューの「制作状況一覧（詳細）」で校正用電子書籍ファイルをダウンロードする

↓

PCの「X MDF校正ビューア」もしくは「BinB Reader」で校正用電子書籍ファイルを開く

↓

チェックする（6ページのチェックポイント一覧をご活用ください）

↓

修正点がある場合は、出版社メニュー内の「お知らせ」ボタンを押して出てくる画面に修正指示を記入し、送信ボタンを押す。送信後、状況をプルダウンで「修正指示」に変更し「状況更新」ボタンを押すと「初稿戻し」が完了する。

電子化した修正指示ファイルがある場合は添付する。**校正の戻しは5営業日以内に完了してください**

- ・フィックス型の場合はページ数（ノンブル）と行数を指定して、修正指示を箇条書きにする。
- ・リフロー型の場合は「底本●ページ●行目の」という位置指定をして指示を箇条書きにする。
- ・具体的な指示が必要な場合は該当ページをプリントし、赤ペンで修正指示を書き込み、それをスキャナで読み取って電子ファイル化し、修正指示の入力画面に添付する。（BinBリーダーの校正ツール「Quick Markup」等を使い、該当ページを画像ファイルとして書き出しても良い）
- ・校正が終わった後は、ステータスメニューを「校了」「責了」などに変更し、必ず一番下の「状況更新」をクリックする。更新されない場合はステータスの変更が通知されず、作業がストップします。



フィックスの場合、校正はこの1回のみなので、修正があった場合は「責了」に、修正がなかった場合は「校了」に状況を変更し「状況更新」ボタンを押す。

↓（修正作業：最長5営業日）

リフロー型の場合は、修正作業が終了した時点で「再校のご連絡メール」が届く



チェックして「再校戻し」を送信する。**校正の戻しは5営業日以内に完了してください**
リフロー型の校正はこの2回で責了、もしくは校了

↓（修正作業：最長5営業日）

緊デジ（JPO/PL）にて検収のあと、出版社へ納品（直接申請）／出版デジタル機構へ納品（代行申請）



各電子書店に配信

6. 校正の例

フィックス型の校正例

- 底本P65、右上のゴミをトル
- 底本P82、イラストとイラストレーター名をトル
- 底本P135、ページ抜け
- 底本P287、版面ズレ。他ページと揃える

リフロー型の校正例

- 底本P16、4行目、思いがけな妥協案を → 思いがけない妥協案を
- 底本P20、32行目、天下国家をを論じ → 「を」をトルツメ
- 底本P62、7行目のルビ抜け。「室生犀星」に「むろ う さい せい」のルビを振る。(モノルビ)
- 底本P75、6行目のルビ抜け。「天鷲絨」に「びろうど」のルビを振る。(グループルビ)
- 底本P135、22行目の
もう絶滅したと思っていた
を
近いうちに絶滅すると思っていた
に差し替え。
- 底本P150、18行目の「辻本浩三」の「辻」を一点しんじょうの「つじ」に(異体字)
- 底本P214の図版、暗くて見づらいのもっと明るく

※モノルビの指定では、ふりがなを全角のスペースで分けてください

7. 例外ケースの処理

文章による修正指示が難しい場合は、プリントアウトしたものに赤字を入れ、それをスキャン画像化して出版社メニューの校正指示画面から「添付書類」としてお送りください。外字、異体字、記号などの指示も画像化したものを送信した方が安全です。

フィックス型の文字修正は、原則として対応できません。

緊デジ仕様で対応できないような重大な修正が発生した場合は、修正の指示を出す前に必ずパブリッシングリンクまでご相談ください。また、PC画面ではなくiPadやNexus7、Koboなどの実機での検証を希望される場合もお問い合わせください。

コンテンツ緊急電子化事業 出版社・編集者向け 電子書籍校正の手引き

発 行 ● 日本出版インフラセンター (JPO)

発 行 日 ● 2013年2月12日 ver. 1.4

制作協力 ● (株) パブリッシングリンク + (株) 出版デジタル機構